みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「拡大」から「脱構築」へ：共同研究：韓国社会―グローバル化の諸局面

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朝倉, 敏夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005844

PROJECT

プロジェクト

「拡大」から「脱構築」へ

共同研究：韓国社会
――グローバル化の諸局面

文 朝倉敏夫

韓国研究の人類学的アプローチ

21世紀の今日、韓国社会は急速に変貌しつつある。加えて朝鮮半島という地理的空間を越え、コリアンはグローバル化しつつあり、海外に住むコリアンは韓国の総人口の15パーセントをこえる勢いである。いまや韓国社会は、ローカルとグローバル、プレモダンとモダン、ポストモダンが入り交じり、混沌としているようにみえる。その結果、韓国社会は、見る視点、方法によって異なる姿で描かれるようになった。同時に韓国社会は、カルチュラル・スタディーズをはじめさまざまな研究分野で興味深い研究対象として注目されるようになり、相対的に人類学的研究の地位が低下していることは否めない。

本研究会はそうした今日的状況をふまえ、従来の「韓国研究」の枠組みを広げ、韓国社会に対する多様で新しい人類学的アプローチの可能性を探ることを目的としている。当初は韓国研究の「拡大」をめざしたのであったが、途中からむしろ従来の研究の視点や方法を「脱構築」する方向へと変わっていった。もともと「脱構築」は、東アジア研究の立場からコメントをいただくためメンバーとして参加していただいた渡邊欣雄による人類学的研究への提言であった。本研究会では、これまでの韓国社会・文化をシステム（体系）や歴史的過程を中心に据えた研究から、海外のコリアンとの関係性、「もの」や「ものの流れ」、「産業」も視野に入れ、そのダイナミズムをいかに人類学が捉えうるか、そのために従来の人類学的韓国研究の何を括弧に入れ、解体せねばならないのか、という問いかけに向かっている。

この「脱構築」は、民博の共同研究会が韓国研究の一つの流れを作り出してきたことを考えると、従来の韓国研究の「脱構築」を意図することでもある。この共同研究会の大きな目的は変貌する韓国社会への今日的アプローチを探るだけではない。人類学的な韓国研究のターニングポイントを作りだそうということにもある。この点を明らかにし、本研究会の背景と意義を明確にするために、これまでの民博における共同研究会の流れを概観してみよう。

ワシントンDC郊外にある大型スーパーKorean Korner。（撮影：朝倉）

研究の継続

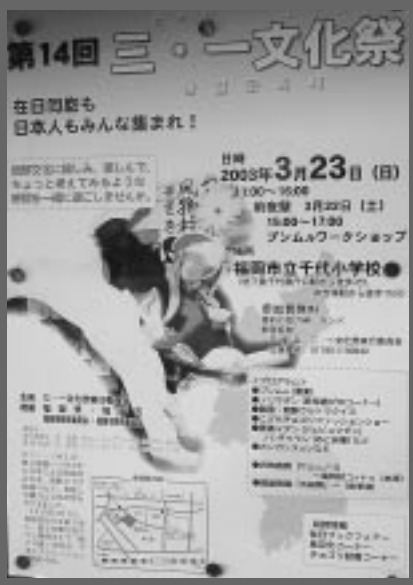
本研究会は、民博における韓国研究に関わる共同研究会として第7期にあたる。第1期では、民博をこの分野の研究センターとし、今後の研究方向をみいだしてゆくことを目的として、1980-81年度に「韓国の伝統文化とその変容」が始まった。70年代から本格的に韓国でのフィールドワークがはじまり、その成果が実を結び出した時期にあたる。第2期では、6年間のブランクの後、1987-88年度に「韓国社会の人類学的研究――方法論の検討」が再開された。人類学は実態調査を共通の研究方法とするため、アプローチや分析の態度は共時的なものが多いが、この研究会では、それを歴史研究に結びつけようといういくつかの試みがなされた。これをふまえて、第3期（1989-91年度）「韓国社会――伝統の形成とそのトランスフォーメーション」、第4期（1994-96年度）「韓国社会――高度経済成長下のフィールドワーク」では、伝統を形成した朝鮮時代、戦後の高度経済成長期という歴史を視座においた研究会がつづけられた。韓国のような長い国家制度の歴史的背景がある社会を対象とする場合に、歴史学的アプローチ、近代化の問題に取り組んだことで先駆的であった。

その後、常設展示のリニューアルもあって、第5期（1997-99年度）「『もの』を通して見た朝鮮民俗文化」、は物質文化に目を転じている。これはともすれば社会関係や宗教などに傾斜しがちであった韓国研究を補う意味があった。さらに2002年に民博で開催した特別展『2002年ソウルスタイル』と、これと並行する形で行われた第6期（2001-02年度）「韓国現代生活文化の基礎的研究」は、物質文化に着目しつつ、急速に産業化、都市化しつつあった韓国社会を捉えようとした試みであった。

しかしながら、以上の共同研究会には共通する準拠枠があった。それは70年代から80年代の諸研究が明らかにした韓国の「伝統社会」の社会関係、構造であり、われわれの共同研究会はこの準拠枠を補足する形で展開されてきた。韓国社会は非常に高度な中央集権的国家制度と「単一民族国家」的な性格をもつ。加

えて戦後の朝鮮半島の一部である韓国社会自体が強固な国民国家を作り出そうとしてきた過程がある。ゆえに「大韓民国」を対象にしてきたこれまでの諸研究が「伝統社会」を本質主義的な準拠枠としてきた問題点が指摘されよう。

そこで、今回は、ふたたび「韓国社会」をタイトルにうちだしつつ、現代に視座をおき、「グローバル化」をテーマとした共同研究をたちあげることにした。現代は、ひと・もの・情報のグローバル化時代を迎えており、韓国社会においては、ことに海外への移民が現在進行中である。そこで海外コリアンの研究をしているメンバーを中心に集まっていただき、韓国社会と海外コリアンの関係について共同研究をすることにした。研究会は参加者めいめいの個別研究の報告とそれをめぐる討論の形ですすめられた。



福岡市の在日コリアン集住地区でおこなわれている民族祭り。民族性の回復や主体性の確立、地域住民との共生などをテーマとし、農楽演奏のほか、朝鮮の伝統遊びのコーナー、朝鮮料理の屋台などが設けられる。「三・一文化祭」の名称は、1919年の三・一独立運動にちなむもの。毎年3月におこなわれている。

（撮影：島村恭則）

海外コリアンの研究

海外に居住する韓（朝鮮）民族は、約600万人と推計される。その居住地は、日本、中国、中央アジア、サハリンといったユーラシア圏のみならず、アメリカ合衆国、カナダ、オーストラリア、ニュージーランド、そして中南米にまで広がっている。

こうした海外コリアンの拡がりは、世界の近・現代史とつながっている。中央アジアへの移住は19世紀後半から始まったが、彼らの大部分は1937年、スターリン政権によって沿海州地域から強制移住させられた人びととその子孫である。アメリカ合衆国への移住は、1965年の移民法改正により急増しはじめた。このコリアン・アメリカンの研究に関連して、サントリー文化財団から支援をうけた研究プロジェクト「アメリカ合衆国における東アジア系移民の連帯と葛藤――多元的共生の観点から」と共同で研究会を開催し、Nancy Abelmannに「イリノイ大学の周辺町における韓国系教会、小嶋茂に「Japan TownからInternational Districtへ――シアトルの事例」を発表していただいた。

日本社会におけるコリアンの存在は、韓国社会の近代、現代の変化を考えるうえで重要である。植民地期に渡日したコリアンと近年の新来コリアンの関係は、韓国社会の近代と現代を反映するものである。

韓国社会には華僑が約2万人いる。彼らは韓中国交正常化、韓国の通貨危機、韓流ブームといった韓国・中国・台湾の関係の動きのなかで、ナショナル・アイデンティティのもち方を微妙にずらしている。さらに、韓国社会は北朝鮮からの脱北者の問題を抱えている。

共同研究会では、このような海外コリアンの歴史と現況、韓国との関係について報告、討論がなされた。

「もの」「ものの流れ」「産業」への視点

共同研究会では、海外コリアンだけでなく、「もの」に焦点を当てた報告もなされた。ただし、「もの」を「伝統社会」に位置づけるのではなく、そこから地域を越えた関係、近代以降の変化をみようという点で、それまでの物質研究とは大きく異なる。たとえば、植民地時代の「もの」と「ひと」のネットワークに着目し、朝鮮半島から／への移住者などをとおして、日本の山陰と大陸のつながりを検証する報告、韓国の酒造業のグローバル化を社会史的に位置づける報告、ローカルな生態系で生まれた生活雑器が植民地支配、国家による統制、産業化、経済のグローバル化という社会変化のなかでどのように展開したかという報告など、興味深い報告がなされた。

同時に、韓国社会内部で起こりつつある新しい変化も検討された。大邱市の高層アパート団地に出現した露天商街にみいだされる住居環境・消費生活・流通組織などの変化と、それに関係する露天商のあり方の報告、韓国社会の葬制における土葬から火葬への変化の報告などから、韓国社会の産業化の問題、都市化による家族の変化、環境問題も議論された。

韓国研究の「脱構築」

2年間の共同研究会のなかで明らかになってきたのは、「大韓民国」を包含するコリアン世界の多様性と変化であり、それは従来の「伝統社会」的視点では捉えがたい問題を提起するものであった。

現代に視座をおきつつも、歴史のなかで捉えるべき「グローバル化」をテーマにするという混乱が、私の最初の問題提起にあったため、発表テーマが拡散してしまった感もなくはない。しかし、まさに今日の韓国社会・コリアン世界の特徴は変化と拡散にあり、その背後にグローバル化の問題がある。最終年度を前にして、本研究会から、従来の韓国研究を「脱構築」するような新たな視点や方法論が生み出されることを期待している。

追記：共同研究会のメンバーではないが、ソウル大学人類学科の全京秀教授が東京大学の客員研究員として来日されており、「学問と帝国のはざまでの秋葉隆――京城帝国大学時代を中心に」と題して発表した。

あさくら としお
民族社会研究部教授。
社会人類学、韓国社会論専攻。
著書に『「もの」から見た朝鮮民俗文化』（編著、新幹社、2003年）、『韓国を知るQ＆A115』（千里文化財団、2000年）などがある。